



Title	社会的スキルの階層的概念
Author(s)	大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2008, 8, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11052
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

社会的スキルの階層的概念¹⁾

大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

社会的スキルは、個人が社会を指向する動機づけ的な心理性であるだけでなく、適応水準を示す概念でもある。社会的スキルが注目され始めた当初から、社会的スキルは、下位構造を有するというだけではなく、プロセスとして認識され、いくつかのモデルが提唱されている。その一方、社会的スキルは並列的に構成要素で成り立っている訳ではなく、個人、関係、社会、文化と社会的適応に向かうステージがあり、それに応じて発揮される要素は異なる。しかも、社会的広がりや考慮するスキルほど、そこに含まれる構成要素はより多くの外部要因からの影響を大きく受けるであろう。社会的スキルは、文化依存の低い基礎スキルから多くの要素を有機的に組み立てた目的に応じたスキルなど多様であり、それは階層的である。自・他文化の規範に同等に対処できる実践の工夫が必要であろう。

キーワード: 社会的スキル、対人コミュニケーション、非言語的コミュニケーション、記号化、解読

1. 社会的スキルの概念

人は、ア・プリオリに社会を指向する。自分一人だけでは、自分とはなにかということを決して理解できず、他者との関係の中にあって、他者との「比較」を通じて自分を捉えることができる。他者との相互作用において、自分の言動に対して他者がどのように反応するのか、その反応を読み取ることによって、自分の特徴を社会的なものとして初めて理解することができるのである。唯一の存在であっては、自分とか唯一であること自体の概念も生じ得ない。われわれは比較される(する)ように仕向けられている。われわれは、このように社会的に位置づけられることを知ることから、自己の基盤としての安定性、そして、変化の可能性をも理解できるものなのである。

適応的な関係を築き、維持していくためには、現代では、以前よりもメディア状況が多様化しており、意図的な努力が必要であるといえる(大坊, 2002)。

対人関係は、お互いのメッセージを適切に送受信することによって円滑に展開される。学習可能な対人関係を円滑に運営する適応能力を社会的スキルという(大坊, 1998)。社会的な受容と個人の社会的適応を前提として、適切な対人的行動をとることができる場合に、社会的スキルが備わっているといえる。社会的スキルは階層的な構造をなすものであり、その基本要因は、自分のメッセージを適切に表出し(記号化)、他者のメッセージを的確に把握できる(解読)、コミュニケーション・スキルに求められる。このコミュニケーション・スキルを基礎として、特定の対人的な機能を達成するためのスキル(特定スキル; 関係開始・維持、自己開示・呈示、親和促進、リーダーシップの発揮など)があり、さらに、一時的ではなく継続的な働きかけを要する、集団運営、異文化適応、不適応の改善などの目的が特化された目的的技能がある。すなわち、社会的スキルは相応の構造をなしており、どの面を

扱うかによって、その要素は同一ではないので、社会的スキルを向上する法は様々ではない。

社会的スキルは、対人コミュニケーションの記号化と解読、他者や関係についての認知を基礎としながら、その上に自己表現や対人関係の規則による統制を受けながら発揮される。

また、社会的スキルの構成要因として、大坊(1998)は、1)コミュニケーション、2)察知・推測(メタ・コミュニケーション)、3)対人認知・状況理解、4)自己表現、5)対人関係の調整、6)社会そして組織にある文化規範・規則、7)個人属性を挙げている。さらに、相手との関係の目標内容(具体的な共同作業を要するのか、暇つぶしなのかなど)、文化的背景(個人中心か集団主義的文化か、主張的、それとも抑制・調和的行動が重んじられるのかなど)などは社会的スキルの全体に影響する。社会規範は自己表現調整規則に影響する。個人属性は対人コミュニケーション、自己・対人認知、自己表現、対人関係の調整に特に影響を与えるものであろう。

なお、これらの要因の関連について、大坊(2005)は、社会的スキルは、対人コミュニケーションの記号化と解読、他者や関係についての認知を基礎としながら、その上に自己表現や対人関係の規則(社会的な影響を暗黙のうちに受ける)にかかわる社会的スキルが発揮されると、社会的スキルが階層的概念であることを指摘している。

円滑な対人関係を進めていくためには、臨機応変にその状況に応じた社会的スキルを使える必要がある。適宜自分のスキルを点検し、不足を補い、変化への対応を心がけなければならない。社会的スキルは基本的にはどのような関係でも通用するオールラウンドなものであるが、それぞれの目標に応じて強調される側面は異なるといえよう。

社会的スキルを磨くことは、対人関係を円滑にすることであり、適応的な生き方をするために必要である。ここで、

最も中心となる問題は対人コミュニケーションである。相手に伝えたいメッセージを特定の言葉や非言語的コミュニケーション(ジェスチャー、視線、距離の取り方、衣服などに)記号化する。心の内部にメッセージが生じただけではそれは相手に直接には伝わらない。これを特定のコミュニケーションのチャンネルにのせ、それを相手に発信する。そうするとそれを適切に受け取ることのできた相手はチャンネルに表れた行動を解釈(解読)する。この循環過程が対人コミュニケーションなのであり、適応的な対人関係の基礎をなすものである。

メッセージを適切に記号化できる人は、一般に他の人のメッセージを解読する能力も高く、相関的である(Friedman et al., 1980; 大坊, 1991)。すなわち、メッセージを適切に送信する人はうまく相手のメッセージを読み取ることもできる。社会的スキルの発揮は、このように、個人に応じて決まるとともに、相手との関係によって大きく左右されるものでもあり、個人だけの要因で決まるものではない。相手自身の特徴、相手との関係、環境、状況などによって多様に影響を受ける。

そして、コミュニケーションには多くのチャンネルがあり、通常は代替可能である。しかし、状況によってはチャンネルが1つしか使えないような場合には円滑な相互作用は容易ではない。例えば、典型的な例として電話が挙げられる。使える手段は音声のみなので、多くのことをそのチャンネルに込めなければならない。言葉がつかまって沈黙となると、他に替わるチャンネルがない。ところが他のチャンネルが使える対面的な場面では、黙っていても手のジェスチャーや身体の向きが見え、顔面表情の手がかりもある。メッセージの伝達は絶え間なくできる。このような相補う動きがコミュニケーション・チャンネル間には存在する。われわれの社会的な場は、相互に関連しており、常にシステムをなしている。

社会的スキルの特徴として、1)目標指向的、2)複数の行動から構成され、3)時系列的に構成、4)具体的な状況と結びつく、5)明瞭な行動単位による階層的構造をなす、6)学習可能である、7)認知的に統制可能、が挙げられている(大坊, 2006)。このように、特定の目標を達成するために、一連の行動の過程として具体的な状況に応じて発揮されるものであり、かつ、個々の行動要素を取り出すことも可能である。しかも、これと類似する目標の場合や状況において迅速に発揮される。その意味では、人為的な操作によって、特定の効果を上げることが可能となる。

2. 社会的スキルのプロセス

社会的スキルがどのように発現するのかについては、英国の Argyle(1967, 1988)に発する運動スキルモデルを先ず挙げることができる。かれらは、これによって社会

的な相互作用の要因を概念的に整理でき、要素の相互関係が明らかにできるとし、また、対人行動に必要なとされるスキルは何らかの運動を行う際のスキルと同様に考えることができるとしている。Argyle との共同研究をもとに、Cook(1971)は認知、コミュニケーション要素の循環プロセスのモデルを示している(Figure 1)。

相手(個人とは限らない)との関係で何を問題にして行動するのか、目標を明確にすることから始まる。それに応じて具体的な行動をとる。そのためには、相手の行動から必要な情報を採り(知覚)、その情報から自分なりの見方、ルールなどを踏まえて相手の特徴を推論する(解読)。そして、目標に合わせて相手に働きかける計画を立て、行動に移す(記号化 - コミュニケーション)。このように、基本はコミュニケーションの記号化と解読にあり、加えて相手との関係の目標や種類の認知が重要とされている。

このモデルは、対人コミュニケーション、対人認知、社会的サポート、パーソナリティの研究成果を総合的に扱っている。他者との関係を円滑にするためには他人をどれだけ適切に認知するのか。他人の意図を推測し、その特徴をできるだけ正確に捉えたい。それから他者に対する自分の働きかけを決め、そして、その際に自分のメッセージを如何に正確に相手に伝えることができるか(記号化)、相手のメッセージを正確に解読できるか、などの要素がある。したがって、社会的スキルは、不適切な行動に部分的に手直して済むような安直な処世術ではない。まして、固定的なマニュアルを用意すれば済ませられる類のことではない。ただし、十分に学習可能であり、生活の質にも関わる総合的な概念なのである。

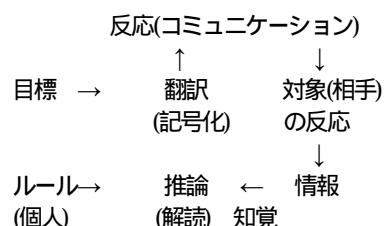


Figure 1 クックの社会的スキルモデル (Cook, 1971)

相川(2000)は、いくつかの先行研究を参考にしながら、包括的な要因構成のモデルを考えている。それは、相手の対人反応の解読、対人目標の決定、感情の統制、対人反応の決定、対人反応の実行という循環的な過程を考えている。かれの見解は、対人的な相互作用の開始・運用に的を絞ったものである。この中で、解読には、対人反応の知覚(相手のコミュニケーション行動に気づく)、対人反応の解釈(その動機、あるいは状況の意味などを読みとる)、対人感情の生起の過程(解釈に伴い、手がかりの帰属が行われ、感情が発生する。これはその後どう

働きかけるか - 接近する、回避する - の方向づけを与える)を下位に設定している。この設定は、Argyle(1967)の運動 - 知覚機能をベースにした運動スキルモデルの要因に即している。また、対人反応の決定には、スキル因子(質問、会話、謝罪、主張、拒絶、傾聴などの対人反応の構成因)の決定、スキル要素(スキル因子を構成するもので、個々の動作; うなずく、微笑、視線を向けるなどのコミュニケーション行動群であり、これらは、他の要素と組み合わされて因子を構成して、対人関係の親疎などの方向性を持つとされている)の決定、対人反応の効果予測の要因(発動したスキル因子がどのような効果を持つかの予測的・認知的過程)としている。

個々の行動とその背後の能力を含めた一連のプロセスを社会的スキルの生起過程モデルとして表現している(Figure 2)。対人場面において、個人が相手の反応を解読し、それに応じて対人目標と対人反応を決定し、感情を統制した上で、対人反応を実行し、その行動がまた新たな対人相互作用を展開させるという循環的な過程で社会的スキルを捉えたものである。個々の対人行動やそれに至るまでの認知や判断を決定する際の参照先として自分の経験に基づいて導かれた、当該者の社会的行動方針ともいえる社会的スキーマを想定しており、対人関係を円滑に進めるための能力は、既有的の経験にもとづいて決まることを示している。

この社会的スキーマは、社会的規範、暗黙のパーソナリティ観などの諸要素を含むゲシュタルト性を持つ、中心特性的なものと考えられる。生起過程にある諸要素との関係については、多大な検証が必要である。

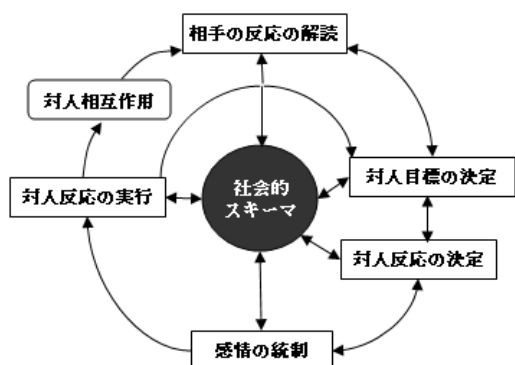


Figure 2 社会的スキルの生起過程モデル(相川, 2000)

3. 社会的スキルの階層性

前述の社会的発現のプロセスに示されているように、社会的スキルを構成する要因は、決して横並びの水準化された関係にはない。情報収集と対人反応の決定では、それぞれを意味づける内容は自ずと異なる。すなわち、後者では、対人関係の種類、所属する集団、社会の規範による影響を受けており、個人の持つ能力だけでは

対処できず、適応し難い。

社会的スキルは、状況や社会規範などによって影響され難い、通信そのものによるものから、前述のように、対人関係、集団、社会との結びつきがしだいに強まり、より社会的目的が具体化するほど複雑に組み合わせられて発現すると考えられる。

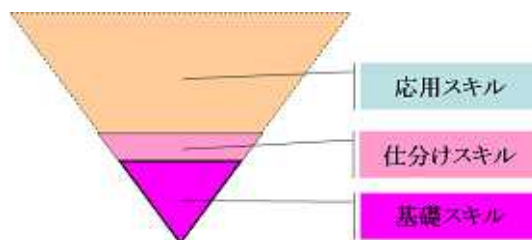


Figure 3 後藤・大坊(2003)の社会的スキルの逆三角形モデル

Figure 3は、大坊(1998)を踏まえて、社会的スキルを基礎から応用への階層構造として説明したものである。

最も下層の「基礎スキル」は、コミュニケーションの基礎となる要素から構成される。言語での意思伝達や、非言語行動の機能、顔面表情による感情表出の方法などの対人行動が中心となる。また、他者に対する信頼感や愛他的な感情といった対人関係に関する信念や価値観など、集団内での行動、自己観など自己認知に関わるものなども含む。相手や場面に関わらず、どんな対人状況にも適用しうるような他者に対する信念や自動化された対人行動(例: 人と会えば挨拶をする、相手が発言しているのを聴く)であり、これらのスキルはこれまでに繰り返された経験が蓄積され、その当事者の対人関係に対するオリエンテーションとなって習慣化されると考えられる。

中位層の「仕分けスキル」は、経験により獲得した状況特定の対処法である。具体的な相手や状況に対応した対人関係についての経験・知識を分類し、その場に応じた知識を選択する能力である。例えば、相手に応じて依頼の仕方を変えるなどであり、それを状況に応じて選び出し、それに応じた行動ができることである。なお、対人関係の知識は、比較的判断しやすい手がかりごとに整理されているので、その知識を個々の状況に当てはめれば、その対人場面での目標を達成しやすくなる。

上位層の社会的スキルである「応用スキル」は、単純なかたちでは整理できない未知の状況、複雑な状況に対して、これまでの知識や経験を網羅的に活用し、それを組み合わせ、目標達成に向かう統合的な能力のことを指す。状況認識力と、それへの対処力を兼ね備えていなければならない。そのためには、社会規範、文化依存の価値観、道徳観なども含まれる。

下層のスキルは、上位のスキルを支え、かつ、活性化させる下地ともなっている。

藤本・大坊(2007)は、国内外の既存の社会的スキル尺度を6つの尺度(自己統制、表現力、解読力、自己主張、他者受容、関係調整)にまとめ直し、その6つの尺度を表出系(表現力、自己主張)、管理系(自己統制、関係調整)、反応系(解読力、他者受容)という3つの系や、基本スキル(自己統制、表現力、解読力)、対人スキル(自己主張、他者受容、関係調整)として階層化している。そこで主に取り上げたスキルは自己や二者関係を中心としたコミュニケーション・スキルに注目している点が特徴である。そして、後藤・大坊(2003)や毛・大坊(2005)を勘案して、Figure 4のモデルを示している。

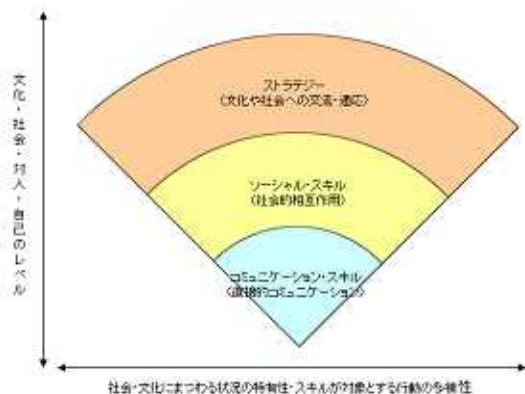


Figure 4 藤本・大坊(2007)の「スキルの扇」モデル

下位の“コミュニケーション・スキル”は言語・非言語による直接的コミュニケーションを適切に行う能力であり、主として個人の個別の行動に焦点を当てた概念である。自分の意図を込めて発言する、興味のある対象に視線を向ける、言葉では示しにくい図的な特徴を示すために宙に手でその形を描くことなどのように、特定の状況に対する具体的なコミュニケーション行動を指すものであり、それ自体は個人を超えて一般性が高い。なお、これは、さらに、基本スキルと対人スキルに分かれる。なお、もう1つの軸として、表出系(表現力、自己主張) - 反応系(解読力、他者受容)、管理系(自己統制、関係調整)という視点もコミュニケーション・スキルに込められている。

中位の“ソーシャル・スキル”は対人関係に主眼がおかれた社会性に関わる能力であり、対人関係や集団・組織のレベルに焦点を当てた概念である。コミュニケーション・スキルと比較すると相手や場面に応じた、より多様な行動が要求されると同時に、その行動は一連となって相乗的に作用する。相手や状況への依存性がある。

上位の“ストラテジー”は、よりマクロな文化・社会への適応において必要な能力、すなわち多様な状況に適用できる汎用的な能力といえる。そのためソーシャル・ス

ル以上に多様な行動が要求される高度なスキルである。換言するならば、文化、歴史を踏まえた包括的なものであり、いくつかの種類が考えられる。

社会的スキルの階層性

社会的スキルは、コミュニケーションの基本的な機能の発揮による基礎スキルである記号化や解読やこの両者のタイミングの調整などの対人コミュニケーション能力を基底とする階層性を持つと考えられる。それを踏まえて、特定の関係を築く・維持する心理的な意味を発揮するための特定スキル - 期待する自己像のアピール、自己主張、特定の他者へ及ぼす説得的行動、特定の他者との関係の開始や維持、また、対人的な親和性の表出、特定の集団における地位と勢力の行使にかかわるなど - がある。さらに、これらを総合する応用的なスキルである目的スキルがある(Figure 5)。これは、集団の円滑な運営、担当職種に応じた適切な人材の発見や開発、対人関係に不適応傾向のある人の適応力の回復、異文化への適応、企業等における営業成績を上げるための説得、プレゼンテーション、顧客のニーズの把握、教育場面における学習効果の促進などにかかわる、一定の目的のもとに組織的に実行されるスキルである。状況に応じた対処方略スキルの応用的な実現に寄与するものである。

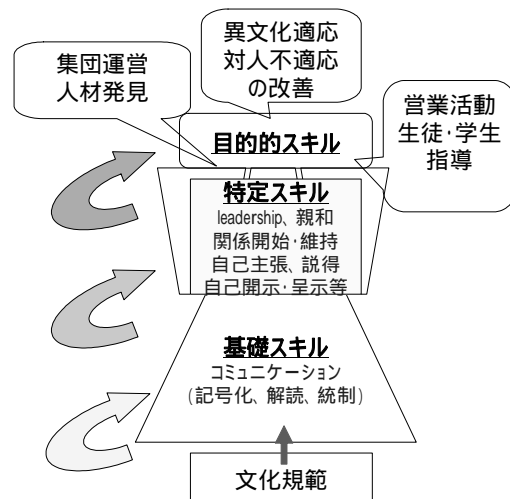


Figure 5 社会的スキルの階層構造 (大坊, 2006)

特定スキルの例をさらに挙げるならば、これは、ある程度場面特定のであり、ある人物への好意を伝えたい、自分の意見を誤解なく、適切に他者に伝え、相手に自分の意図した影響を与えることなどが該当する。

なお、文化規範は、基底として各階層に影響を与えるものであり、上位層のスキルになるほど、それへの影響は大きいといえる。また、下位のスキルはその上位のスキルを構成する単位となる。

このような階層性を踏まえることによって、トレーニングの個々のプログラムを考えて設計することができよう。各プログラムは、基礎スキル、特定スキルが組み合わされて構成されている。また、参加者に体験についてどのような脈絡で説明するのかによって、トレーニングの成果としての有効性も異なりうる。

4. 社会的スキルの文化性

社会的スキルは所属する文化に由来する規範と深い関連があると考えられる。大坊(2003)は、文化において推奨されない行動パターンを表出を避けた方が他者との調和的な関係を築きやすいと主張し、適応という観点から社会的スキルが文化によって規定されると述べている。また、堀毛(1994)や高井(1994)では、日本文化とアメリカ文化との比較を通して、社会的スキルの内容を、どの文化にも存在する文化共通の部分とある文化にしか存在しない文化特有の部分に分けることができるとしている。

毛(2008)は、自由記述調査でまとめた中国人の社会的スキルの特徴を描く項目群をもとに、中国と日本で調査を行い、その結果から、中国人大学生の社会的スキル因子は「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」、「功利主義」であることが分かり、これを踏まえて、中国人大学生社会的スキル尺度(ChUSSI)を開発している。一方、日本人大学生では「思いやり」、「つきあい」、「社交性」、「主張性」という4次元が抽出され、「社交性」因子は中国と日本の両文化に共通していることが示された。同時に、「相手の面子」、「友人への奉仕」、「功利主義」という因子は中国の「面子の文化」、「人脈の文化」などの文化的特徴を反映していることが確認された。ChUSSI は日中文化間で共通するスキルと中国文化の特有のスキルを反映していると考えられる。さらに、異なる中国人大学生サンプルでも、この尺度の有効性が検証されている。

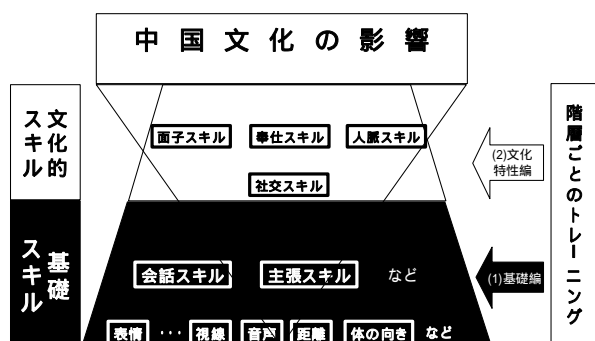


Figure 6 毛(2008)の文化的影響を勘案した社会的スキル・トレーニングのモデル

基礎的な社会的スキルについては中国・日本の文化で共通しているが、「面子」や「人脈」などの社会的スキル

は中国文化に強く影響され、中国に特有である。また、特定の文化的要素を含んだ上で、文化と社会的スキルの関係を総合的に捉えるこの「文化 - 社会的スキル・トレーニング・モデル」は、文化特異性 - 普遍性の視点とその実践の必要なことを示している。

5. 統合的な文化適応

- ダブルスウィング - を目指す -

Yoshikawa(1987)は、異文化適応の過程を 1)接触(contact) - 2)不統合(disintegration) - 3)再統合(reintegration) - 4)自律(autonomy) - 5)ダブル・スウィング(double-swing)の 5 段階にまとめている。自文化とは異なる文化に触れ、その圧倒的に異なるシステムによって混乱した後、自文化との統合を試み、自分独自の仕方でも両文化の折り合いを付けていく。注目すべきは、5段階目である(Figure 7)。この段階においては自文化からも異文化からも柔軟に視点を獲得ことができ、発想できる。一方の文化に偏らず、柔軟な思考ができるならば、適応的といえよう。自文化からも拮抗する異文化からも、適応するための知恵を得ることができることになる。

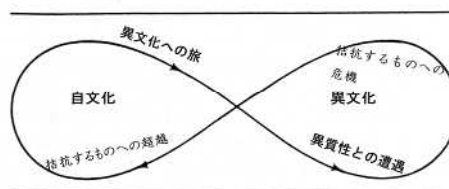


Figure 7 ダブル・スウィング・モデル
- 異質な世界への旅 - (Yoshikawa, 1987)

さらに、この段階では、どちらかの文化に基本となる軸足を置き、他方の文化にはゲスト的な関わりをするというのではなく、二元的な文化(世界)を超越した一種の中間的な立場にいたることが異文化適応のよさに通じる。異文化は文化的な葛藤、危機を引き起こすものの、同時に、成長していくための臨機応変な、多くの視点を与えるものであり、一様に排除されるものではなく、異なる文化からの発想を持ち、さらに、自文化と異文化の両者を統合するような視点へと昇華されることが期待できる。そのこそが、統合的な適応を可能にできる。なお、中国からの帰国者の日本への社会適応について、両文化への双方向的適応については、大坊・中川(1998)に言及があるので、参照されたし。

社会的スキルは、1)構成要因として、2)発効するプロセスとして、さらに、3)実践的なトレーニングのプログラムとして、4)文化適応を理解するものとしてというように、いくつかの観点からモデル化が可能である。実践の観点からすると、基礎スキルを踏まえて、応用できるプログラム

を組み立てる、工夫することが必要である。同時に、グローバル社会の進む今日、適用範囲の広い通文化および文化固有のトレーニングを編成することは急務である。

引用文献

- 相川 充 (2000). 人づきあいの技術 - 社会的スキルの心理学 - サイエンス社
- Argyle, M. (1967). *The Psychology of Interpersonal Behavior*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Argyle, M. (1988). *Bodily communication* (2nd ed.). London: Methen & Co.Ltd.
- Cook, M. (1971). *Interpersonal perception*. Harmondsworth: Penguin Book.
- 大坊郁夫 (1991). 非言語的表出性の測定 ACT 尺度の構成 北星学園大学文学部北星論集, 28, 1-12.
- 大坊郁夫 (1998). しぐさのコミュニケーション 人は親しみをいかに伝えあうか サイエンス社
- 大坊郁夫 (2002). ネットワーク・コミュニケーションにおける対人関係の影響 対人社会心理学研究, 2, 1-14.
- 大坊郁夫 (2003). 社会的スキル・トレーニング方法序説 適応的な対人関係の構築 対人社会心理学研究, 3, 1-8.
- 大坊郁夫 (2005). 社会的スキルの向上を目指すために 大坊郁夫(編) 社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション ナカニシヤ出版 pp.157-167.
- 大坊郁夫 (2006). 社会的スキル・トレーニングに生かされる言語・非言語コミュニケーションの働き 電子情報通信学会技術研究報告, 106, 31-36.
- 大坊郁夫・中川泰彬 (1993). 中国残留孤児家族の社会適応過程の心理学的検討 心理学評論, 36, 398-424.
- Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatteo, M. R. (1980). Understanding and assessing nonverbal expressiveness: The affective communication test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 333-351.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15, 347-361.
- 後藤 学・大坊郁夫 (2003). 大学生はどんな対人場面が苦手、得意か? 日本グループ・ダイナミクス学会第 50 回大会発表論文集, 102-103.
- 堀毛一也 (1994). ひとあたりの良さ尺度 菊地章夫・堀毛一也(編) 社会的スキルの心理学 川島書店 pp.168-176
- 毛 新華 (2008). 中国の若者の社会的スキルに関する社会心理学的研究 大阪大学大学院人間科学研究科博士論文 (未公開).
- 毛 新華・大坊郁夫 (2005). 中国の若者の社会的スキルに関する研究(2) 中国版社会的スキル尺度の構成 日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集, 382-383.
- 高井次郎 (1994) 対人コンピテンス研究と文化的要因 対人行動学研究, 12, 1-10.
- Yoshikawa, M. J. (1987). Cross-cultural adaptation and perceptual development. In Y. Y. Kim. and W. B. Gudykunst. (Eds.), *Cross-cultural adaptation current approaches*. Newbury Park: Sage Pub. pp.140-148.

註

- 1) 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費基盤研究 B(19330142,代表: 大坊郁夫)の補助を受けた研究の一環である(研究分担者: 谷口淳一、磯 友輝子)。

Hierarchical conception of social skills

Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

The purpose of this review is to describe the characteristics of social skills on the previous studies. Social skills are not only the motivational states orientated to be 'social' but show personal adaptation level. Since social skill has been taken particular notes by many psychologists for about thirty years, the concept of social skill has been recognized as a process, as well as holding subordinate components, and some models of social skills were postulated. Social skills are not defined with parallel subordinate components, but with the hierarchical possess which includes personal attributes, interpersonal relationships, and social-cultural features. This arrangement reflects some different stages to attain social adaptation. The elements of those skills that would be needed on a particular stage are not identical from situation to situation. The more skills treat socially spread activity, the more they are affected by complicated external factors. The social skills deal with from basic skills including personal attributes to goal-directed skills organically combined. We should take into account to developing the culture-oriented training program which also covers the counter cultural norms equivalently.

Keywords: social skills, interpersonal communication, nonverbal communication, encoding, decoding.